

惠信尼さまのやさしさ

籠谷 眞智子

はじめに

みなさまこんにちは。私も長い間、みなさんと同じように女子大生の時代がございました。みなさまを拝見しておりますと、むかしを思い出して懐かしい気持ちでございます。今日はそういうことで、高い壇上からみなさまにお教えるというのではなくて、私がこれまでにいろんなことを学ばせて頂きました中で、特に親鸞聖人ご夫妻の話というのに立ち入って、私の浅薄な知識ではございますけれども、みなさまに少しお教えることができたらと思って、多少小道具も取り揃えてまいりました。揃

えるというほど大袈裟なことではないんですけれども、やはり一見していただいて、後々のご印象に、ご記憶に残して頂ければ幸いですと思ひまして、能面など持つてまいりました。

能面と申しますと、もうみなさまご存じだと思ひますが、能楽を上演します場合に、シテ（主役）とか脇役、それぞれの役者のポイントと申しますか、中心になるものを面で表現するわけでございます。ですから、一見しまして「ああ、怖い人物の上演だな」とか、あるいはまた、やさしい女性の面を見ますと、「ああ、やさしい方の上演だな」という、第一印象で直観ながらわかるわけですけれども、能と申しますのは、そういう直観だけではわからない場面があり、非常に深いひだの中に、それぞれ、これまでの日本文化の流れの中で、能というものをどういうふうに理解してきたのか、あるいはまたそれをどういうふうに過去の日本人や、私どもの先祖が能をどんなに大切に見てきたのか、ということを少しでもお考え頂ければ、今日の私の勤めは果たせるかなと思ひでございます。

恵信尼さまのやさしさ

能面

そういう意味で、なにぶんにも、能面というものはみなさまもよくご存じだとは思いますが、どういうものが能面になったのかというふうなことを申し上げてみたいと思います。一番極端にみなさまの直観と申しますか、第一印象として、心に残る能面というのはやさしい面と、恐ろしい面と両面がございませう。まずやさしい面をご紹介しますと、「小面（こおもて）」と申しまして、とてもやさしい人の柔らかな面になっております。これは土焼きでございませうので、実際に顔につけて舞うものではないんですが、これが「小面」でございませう。とてもやさしい顔をしておられます。このお面をちょっと斜め上に向けますと、「ほほほ」と、小さな笑いをもらしながら、やさしく微笑む女性の方の顔というのが浮かんでまいります。それからもう一つ、こうしたやさしい面に対して実際には私どもが、二度と会いたくない、見たくないと思ふような、非常に恐ろしい顔をした能面というものがあつた。もし仮にこれが本当

に実在している人物であったら、夜もうなされてですね、怖くてとても眠れないんじゃないかと思えますけれども、その怖い面がこれでございます。非常に猛々しいと申しますか、般若の面と申しますけれども、この般若の面をつけて怒り狂われたら、とても尋常の人間では太刀打ちできないと思うんですね。

この能面は、鎌倉・室町時代から受け継がれており、今までに、いろんな物語で、この能面をつけたドラマがあります。例えば、お嫁さんを苛めるためにお姑さんがこうした面をつけて脅した話というのが、福井県の方にもございまして、吉崎にはこの話にちなむ能面がありまして、種類もだんだん年代とともに増えてきております。人間がどこまで残酷なものになれるのかと、人間の残酷な感情というのが、どこまで人を不幸にしていくのかというふうなことを、この恐ろしい般若の面が語り継いでくれるというのが、この面の役割なんでございます。これは土焼きですから実際に顔につけて舞うものではありません。実際には軽いお面をつけます。特にこれは福井県吉崎の物語とされ、蓮如聖人が非常に力を入れてご布教なさった場所なんですけれども、そこに伝わる話を申し上げてみたいと思います。

惠信尼さま

惠信尼さまのやさしさ

惠信尼さまはどんなお方かということを簡単に申し上げますと、親鸞聖人の奥様なんです。親鸞聖人というお方はご存じのように、浄土真宗を開かれた開祖の方なんですけれども、その親鸞聖人が非常に御苦労なさって浄土真宗を広げていかれます。その御布教の時に、京都から越後（新潟）の方にかけてご布教されるわけなんです。けれども、越後へ行ったつきりでそこでご布教なさるということは不可能でございますので、親鸞聖人の代わりとして惠信尼さまが越後にお越しになるわけです。そしてそこで親鸞聖人のご布教のお手伝いをなさるわけですが、そのお手伝いに実は越後の地域の女性の御門徒さま方が大変たくさん集まって下さったということなんです。女性の間に、しかも地域的には新潟の地域に、惠心尼さまを中心とした女性門徒が大変増えてきたということが言えるかと思うんですね。そしてその拡大の元を授けて頂いたのが惠信尼さま。親鸞聖人の奥様だということですよ。今だったら夫の仕事の手伝いを

する妻の働きというのは当然なのかもわかりませんが、この鎌倉時代の話の場合、特に宗教の指導者としてお立ちになっております親鸞聖人、そしてその奥様の恵信尼さま、という御夫婦を立ててみますと、浄土真宗の布教の根底には、親鸞聖人お一人のご布教だけでこれまでの浄土真宗の繁栄の元が築かれたのではなくて、実は妻の恵信尼さまの支え、奥様の支えというのが非常に強かったということを、みなさまに申し上げたいのでございます。今日ですと、夫婦が協同して助け合って、家業なり仕事なりを成就していくことは当然なんでもございませうけれども、その先例をつくられたのが、実は親鸞聖人と恵信尼さまのご夫婦ではなかったかなと思っうんですね。お二人の非常な布教の御苦勞というのは、いろんなお話の中でみなさまもよくご存じだとは思いますが、そういう親鸞聖人と恵信尼さまのご布教のご境涯の中で一番心を砕かれたのは、門信徒さま方の中に、どうしてもご布教の意図に添えないというので、大反対をして親鸞聖人とか恵信尼さまのせつかくの教えを無にしようという方も一部にはなくはなかったわけですね。そういう時に実は親鸞聖人も恵信尼さまも決して焦らず、簡単にすなおに布教に乗ってくる人がない地域においてでも、大変気長にご布教

恵信尼さまのやさしさ

を続けていかれたということなんです。そのように布教を続けてゆかれるなかに、実は、親鸞聖人や恵信尼さまの布教に対して猛反対をする人達も中にはあったわけなんです。それは当然なこと、旧仏教と申しますか、これまでにならんと一定した落ち着いた仏教信仰というものを持っておられるところへ、念仏中心の親鸞聖人のご布教と、また恵信尼さまのご布教が重なって来たわけですから、どうしたって、これまで信仰されていたものに対する気持ちを払拭して、一時に塗り替えるということとはとてもできなかったわけですね。そういう非常に支障のある話というのを、実は面に表して作ったのがこの面なんです。ですから、新しい親鸞聖人のご布教に対して、何がなくてもこの地域に親鸞の布教をさせるものかと、何がなんでも恵信尼の布教は許しませんよというふうな非常に抵抗された一部の方々もなかったわけなんです。

その頃の話の一つの面に例えて、（これは陶器の面で能面ではございませんけれども）こういう形の面を用意しまして、上演のとき、これを顔につけて、それぞれの主役「シテ」としての動きと働きというのをみなさんに紹介されるわけです。その場合に、まず浄土真宗の布教というものに、まっこのうから反対して怒り狂って抵抗して

いくのが般若のお面をつけた一部であつたわけですね。そして又、この般若の面に対して、いや、やつぱり浄土真宗の親鸞聖人のみ教えというのに、私は従っていきたいと、教えを受けて、自分の人生の心の拠り所にして行きたいと、そして落ち着いた信仰生活の元に、落ち着いた人間の営みを続けて行きたいという願いをもつ方々もあつたわけで、その一部が実はこの柔和な「小面」こおもてです。これはだいたい女性に例えて使われる面と言われておりますけれども、女性らしいので女性としてみますが、その実は人間のやさしさ、あるいは人間の美しさ、あるいは人間の悲しさというものがこの面には含まれていると思います。ここにおもちした面は、本物でない陶器の面なんですけれども、本物の面を能役者の方がお使いになりますと、いろんな人物の心の表現ができるわけです。とても静かな「小面」、女性の面でございますが、少し斜め下を向いてもらいますと、涙をほとほとこぼして、悲しい表情になるわけですね。「何をそんなに泣いているの」と問いかけてやりたいような悲しい表情になります。ところが、同じこうしたやさしい面でもですね、少しこの面を上に向けて見てみますと、口に笑みがございますので、高笑いとはまではいきませんけれども、「ほほほ…」

恵信尼さまのやさしさ

という非常に明るい笑いというものを、この能面の中に観ることができません。またそういう表現を演じます場合に使われるわけですね。こうした柔和な面に対して、これは人間が誰しも持っている内心なんですけれども、人の心の中には怖い感情も潜ひそんでいるものなんです。普段なんでもない時は、他人に危害を加えるようなことはしないわけですけども、いったん、ある人物が自分に危害を加えるんだと、それに対して許せないんだという感情を持った時に、人間はどういうふうによ変よしていくかというとき、こういうやさしい一面を持っている人間が、実は本当に怒り狂った時にはこういう恐ろしい人間になるんですよということを教えてくれるのが、この能面の論しであらうかと思えます。この般若の能面を好きだという人は変わっている方だろうと思えますが、この怒り狂った恐ろしい鬼の面に対して、それも人間の一理ではあるけれども、その怒りはお静めなさいとおっしゃったのが親鸞聖人なんです。それを応援されたのが奥様の恵信尼さまなんです。

人間、感情をむき出しにして怒り狂ってばかりいたのでは人生がめっちゃめっちゃになってしまいます、ということを教えて下さったのが親鸞聖人なんです。特に恵信尼

さまは、女性の場合、非常に感情的に腹の立つ、般若の面そっくりの気持ちになることがありましても、それはじつと一時抑えなさいと、我慢なさいとおっしゃるのが恵信尼さまの教えだったわけです。私はそういう意味でやさしい人の象徴として、やさしい夫人の面を使って恵信尼さまのやさしさというものをみなさまにお話をしたいわけなんです。これを仮に恵信尼さまのやさしさの一つの象徴として面を使うといたしますと、恵信尼さまの例えですけれども、やさしさの中には「微笑み」の心理があると思います。女性だけではありませんが、人間はやはり「微笑み」というのを忘れてはいけませんよと、この小面に教えられているようです。ちょっと口を少し開きまして、お齒黒、齒を黒く塗っております。これは昔、既婚の女性の象徴としてお齒黒をしているわけなんです。おそらく江戸時代の女性の既婚者のお齒黒というものをこの面も一つの象徴として現しているのではないかと思うわけなんです。既婚者か未婚者かということも、この能面の描き方で分かれてくるわけなんですけれども、私は女性が結婚によってどういうふうに変化していくか、そしてそれがまたどういう立場の時に変化するものなのか、変わっていくものなのかということも考えてみる必要が

惠信尼さまのやさしさ

あるんじゃないかと思えますね。ただ自分の生活の条件に、不満があつて、たとえば妻の場合、夫に不満があつて、その不満をじつと堪^たえているかのように見えるんですけども、実はそれが不満の根底に渦巻いていて、そしていつしか夫に対する心の抵抗を続けているといったことが夫婦の間にあるとしたら、非常に悲しいことだと思うわけなんです。なかなか夫婦の和というのは、とても理想的にはまいりませんけれども、この小面について考えてみました。室町時代によく上演されていた、『葵の上』という能がございます。みなさんも一度くらいはご覧になつてるかもわかりません。

『葵の上』の能をご覧になつた方ありますか？ ご存じの方、ちよつと手を挙げてみてください。まあ、だいぶあるようですね。ご遠慮なさつて静かに挙げてらっしゃいますけれども。この『葵の上』が主人公になり、主役をする能というのはいくらかあります。けれども、その中で使われる葵の上の面^{おもて}というのはこれとそっくりじゃないんですが、これはおもちゃですから。本物のお面というののもっと精巧なものなんですけれども、女性のやさしい面が作成されています。やはりここには努力をしてできるならば、女性はやさしい人であつて欲しいという願いがこの面にも含まれており

ますし、それからまた『葵の上』の時に面として使います小面を、他の出し物にも使うわけですが、これはやはり女性の理想像として、常にやさしさを持つ女性であって欲しいというのがこの面に秘められている願望があると思いますね。そういう意味で両極端ですけれども、このやさしい面に対して非常に恐ろしい般若の二面があると思えます。このように能面は人間の心の二面性をもちあわせているように思います。小面を使いましたやさしい一面と、それから般若の面を使った恐ろしい一面というのが、両極端ですけれども能面の中にはこの二つが秘められているように思えます。また、やさしさと、怖さ・恐ろしさを代表してみますとこの二つに分けることもできません。そこで本当に般若の面と小面の面と実際の私どもの生活感情の中に導入してみるといたしますと、誰だってこういう恐ろしい人にはなりたくないわけです。誰だってやはり柔和な小面の人物になりたいというのが私達の理想ではないかと思うんですが、それは理想であってですね、なかなかその通りにいかないというのが現実ではないかと思うんですね。私はそういう意味で、小面がやさしくて般若の面が恐ろしいと区分けして申しましたけれども、実は人間の感情の本質というのは、この二つ

恵信尼さまのやさしさ

のやさしい面と恐ろしい面とが混在しているのが人間の感情ではないかと思うんです。そして、それを私どもは一つの正しい方向と言いますか、正しく生きやすい方向へ導いていくのが感情の誘導ではないかと思うわけなんです。

やさしい人とは

私どもの生活の中でも、友人同士とか、夫婦の場合でもいいんですが、対立を始めると、なかなか和が保てないという事情が出てくる場合があるわけなんですけれども、そういう時に私は、この能面のことを一つの融和材にして見て頂いたらどうかと思うんです。

いろいろと能面の解釈はあるかと思いますが、私は一つには能面というものが能を演じる時だけの小道具としての能面ではなくて、人間世界の中で、私どもの心の批判材料にしていく。怖い心、そしてやさしい心、こういったものの両面を私どもは持っているんですよということを、直接教えてくれるのがこの能面ではないかと思うんで

す。能を演じる場合に、この二つの面というのは両極端に演じられ、使われるわけなんですけれども、誰だってですね、般若の面はつけたくないですし、近づきたくないですね。ところが、「外面げめんに菩薩内心には夜叉」と言ことはがあり、外の面は菩薩の如くやさしい顔をしているんだけれども、内心は夜叉の如くきつい性格なんだと、こういうふうな表現も一面にはあるわけなんです。しかし、そこを私どもの生活感情の中で、そういう恐ろしい感情というのは、是非、是正していきなさいと、直していきなさいというふうに教えてくれるものが、能の内面にあります。実は演劇の立場から申しまして、恐ろしい能面をつけて演じる能の中に教訓があるように思います。こういう恐ろしい般若の人間にはならないで欲しいというふうな、またこういう柔和な小面のような人間になって欲しいというように、能面は、二面を教えてくれていると思うんですね。実際に能の小面を付けたり般若の面を付けたりして演じてもらえばいいわけなんですけれども、ここでは話だけに留めさせて頂きまして、人間のやさしさとは何か、どういうことかということを見なさんと一緒に考えてみようかと思いません。

恵信尼さまのやさしさ

— やさしい心の積み重ね

「やさしい人」とはどんな人を言うのでしょうか。自分にとって都合のいい人がやさしい人というのが一つあるわけなんですけれども、そういう利害に走ったやさしさではなくて、（それも一つには言えるわけなんです）やさしい人という人は「やさしい心の積み重ねに努力してきた人」。間接的な言い方でちよつと言ひ回しが複雑ですけれども、私はそういうふうにやさしい人とは、たくさんのやさしい人に出会ってきて、そしていつしかやさしい心の積み重ねをしてきた人のことだというふうに考えているわけなんです。そのやさしい心の積み重ねというのは、何でもないようですけれども、やっぱり人間感情には起伏がありますので、時には腹が立ち、感情むき出しに怒りたくなることもあるわけですが、そこを理性を持ってグツと抑えてごらんなさいというふうには、私達に教えているのが、この能面の教えではないかと思えます。感情むき出しにしてガンガン怒りたいんだけど、「ちよつと待ちなさい。ちよつ

とおちついて考えてみれば、あなたにも落ち度があったんじゃないの。」というふうなことからですね、やさしい面に、教えられることもあるのではないかと思うんですね。人の歴史には、長い物語の中で、こういう恐ろしい物語があり、そしてやさしい物語、中世から面を使って具体的に演じてきた歴史があります。そういう中で、私たちがどちらを選択するかというのは、私どもの心の選択眼が決めることだと思うわけなんですが、誰だって恐ろしい人とは言われたくないわけですよ。やさしい人と言われたいわけなんです、そういうやさしい人と言われるためには、人間としてやはり、かなり修養をつまなければできないんじゃないかと思えますね。かく申します私も決してやさしい人間じゃありません。非常に荒削りな人間でございますので、みなさんにこういう壇上からやさしい人の話なんかをする立場ではないんですが、ただ理想として、やはり女性のやさしさというのは、小面に見られるやさしさ、この優美さを私たちは持ちたいものだと思うわけなんです。理想であってもそれを理想として心のなかに抱いているとですね、いつしか人間というのはその思いというものがだんだんと心に浸透してきて、表現の中に、あるいは感情の中に移入されてくるものだと思います。

います。

— やさしい心

「やさしい人」と一口に言いますが、この規定は非常に難しいですね。やさしい人というのは、やさしい心の積み重ねに努力をされた人というふうに言ったらいんじゃないかと思えます。それからもう一つは、やさしい心の子育てをなさった人。あるいはまたやさしい心を育てあげられていった人。これは例えば、父であり母であつてもいいわけですね。おじ、おば、兄弟、先輩であつてもいいわけです。そういう私の前に立つ人たちが心のやさしさを教えて、やさしい子育てや、やさしい心を育てていくために、いろいろと見えないところで教えて下さっているのです。私どもはややもすると、そういうやさしさの教えというものには気づかずに、素通りしていることがあるんじゃないかと思えます。そういう意味では、やさしい心の人に出会えることを努力したらどうかと思うんです。自分勝手に感情的に生きていくだけでは

なくて、非常にやさしい子育てに心を尽くしている人。例えば身近にある、みなさん方のお父さんやお母さんもそうです。あるいは兄さんや姉さんでもいい、そしてお友達であつてもいいわけです。私たちが知らない間に見過ごしてきている中に、とても身近なところにやさしい心を持った人がたくさんいらつしやるんですけれども、私たちは見逃してきているのではないかというふうなことを思うわけなんです。そしてあの人は怖い人だとか、あの人はきつい人だとか、一方的に決めてしまうことがあるわけですが、そういう時にちょっと反省して、自分自身の心の中に例えば一方的に相手を批判して、怖い人だと決めつけてしまう気持ちがないか、また自分は、他の人から怖い人だと思われてはいないか、と反省してみる必要があるのではないかと思うわけなんです。

— 『カラス・七つの子』に学ぶ

やさしい心の歌を歌ったのはたくさんあるわけですが、その中で、やさしい心の人

恵信尼さまのやさしさ

に出会えるということ、一つの歌の中で示しています。「カラス・七つの子」という歌がありますね。みなさんもよくご存じだと思います。「トカラスなぜ鳴くの…」という歌ですが、ご存じの方どれくらいありますか。大部分の方があると思いますね。「トカラスなぜ鳴くの　カラスは山に　かわいい七つの子があるからよ　かわいい　かわいいと　カラスは鳴くの　かわいい　かわいいと　鳴くんだよ」というところで終わるわけですが、カラスがただカーカーと鳴いていることを、我が子が「かわいい」という表現に変えてみるだけではなくて、これは人間感情にも通じるものではないかと私は思うわけなんです。親が子をかawaiiがるのは当然なんですけれども、そういう中で、

子供をどのようにかわいがっていくかというのは、一つの親の教育の、子育ての課題ではないかと思うんですね。そういう意味では、私は『七つの子』の話をいたしましたけれども、これはほとんど知らない方はないと思いますが、やはり子育ての場合に「かわいい」というのは、これは例外なくみんな子供をそういうふうに思って、大事にして子育てをしているんだと思うわけなんですけれども、実はこの『七つの子』に例えておきます、カラスのわが子への愛情というのは、人間の感情に置き直してみますと、あまり子供に対して過剰にかわいい感情を押しつけるということは、賛成できないではないかと思は思うわけなんです。ただわが子だけがかわいい。わが子に限って決して悪い面はないというふうに子供を過剰評価をしている親というのは、私も含めて多分におありになるんじゃないかと思えますけれども、これをちよつとわが子に対して冷ややかな思いで眺めていきますと、親として子供に教えておかなければならないこと、親として、子供にはしてはならない人間の道というものを教える必要があると思いますね。『七つの子』の歌詞の中には「かわいい　かわいい」と言ってカーカーとカラスが鳴いているんですけれども、私はこの中にカラスの鳴き声を通して人

恵信尼さまのやさしさ

間に対して、決して「かわいい　かわいい」というだけの育て方ではダメなんですよと、その中には「かわいい」反面に、その一部にはわが子をわがままにしてはならないわけですから、かわいさというのにプラスしてやさしさというものを子供に教えていかなければならないんじゃないかと思えますね。人間のやさしさ、人のやさしさというものはやはりこれは両親による家庭教育で培われていくものだと思うわけなんです。それは家庭教育の理想ではないかと思えます。ここで般若の面とか小面とかを対比して話の最初に出してみました。誰だって恐ろしい般若のような人間にはなりたくないわけです。ところが、いつか知らず人間の感情というのは、自分の感情をむき出しにしてまいりますと、理性的な小面のやさしさというのが消えてしまいました。感情本意の般若の心というのが育つてゆき、いつのまにか伸びてゆくものではないかと思うわけですね。そういう意味で私はもう一度、『カラス・七つの子』カラスの歌ですね、この歌をもう一度反省を含めて歌ってみてはどうかと思うんです。『七つの子』ご存じの方。みんなで一緒に歌ったらいいと思うんですが。みんなで子供にかえって『七つの子』を一度歌ってみようと思うんですが。知らない人？　歌わせま

せんから決して。全員挙手。じゃみんな知ってるわけよね。小さい声でいいから。プリントしてありますように、『七つの子』と一緒に歌って子供にかえりましょう。いいですか？ いち、にの、さん。

♪カラスなぜ鳴くの　カラスは山に　かわいい七つの子があるからよ　かわいい
かわいいと　カラスは鳴くの　かわいい　かわいいと　鳴くんだよ

ありがとうございます。何でもないようだけどね、この歌を歌い終わってみますと、子供にかえり、カラスの気持ちにかえってみることができるんじゃないかと思うんですね。カラスの歌を歌ってみて、私どもは、人間感情の穏やかさ、やさしさということを学びます。一緒に斉唱することによって気持ちを一つにしていくというのも大事なことです。友達の間でどうしても自分本位の生き方をしようとすると孤立してしまう場合がありますけれども、人間の感情の中で、また友人関係の中で、孤立ということを私は非常に寂しいことだと思えます。ですから、極めて努力して、一人に

恵信尼さまのやさしさ

ならないように、孤立しないように、そのためにはお友達を大切にしていかれたらいいと思うんですね。お友達との関係がうまくいかないと、どうしても孤立してしまうという例があるわけなんですけれども、私はこのカラスの歌の中に、みんなでカラス村を守っていきましようよというふうなものがあるんじゃないかと思えますね。ですから、私どもの友人関係の中で一人だけ孤立してわがままな思いをしていくんではなくて、みんなで助け合って行こうじゃないのという気持ちで、この『七つの子』の中にはあるんじゃないかと思うんですね。私はそういう意味で、カラスの『七つの子』の歌を一人でいる時でも口ずさんでみることがあるわけですが、それは何か寂しい時に、このカラスの『七つの子』の歌によって、癒されるものがあるんですね。相手はカラスなんですけれども、人間感情に置き直してみると、私どもは、みなさんもそうじゃないかと思うんですけれども、いつも何か寂しいものを抱えているのが人間の気持ちではないかと思えます。そしてその中には、ある不特定の方に対する嫌な感情というのもお持ちかもわかりませんが、そういった感情の起伏に対して自分の心を鍛えて行くと言いますか、やさしい方向に、心のやさしい積み重ねに努力をしていきまし

ようというふうなことを考えてみました。

つぎにやさしい人の話として恵信尼さまのやさしさを紹介してみましよう。

理想的な結婚とは 一人の道

恵信尼さまは最初からやさしい方だったというふうに限定できるわけではないんですね。親鸞聖人三十五歳の折り、恵信尼さまが二十六歳の折りに、記録によるとこの年に結婚されていまして、どちらも当時としては非常に年齢的には遅れた結婚だったんですけれども、それだけに親鸞聖人にしましても、恵信尼さまにしましても、それぞれのご人生の中で非常にご苦勞なさっているわけです。京都で最初ご夫婦になられて出発されているわけですが、それから新潟の方へ、これは親鸞聖人のご布教のためというふうなこともありまして。恵信尼さまも親鸞聖人と共に新潟へいらっしやるわけですが、もう一つ大きな理由は恵信尼さまの生まれた土地が新潟であったということです。この新潟の土地で浄土真宗の布教をされて、浄土真宗の新しい根付きという

惠信尼さまのやさしさ

ことを惠信尼さまは考えておられたと思うんですね。その布教の基本、土台になる方が、女性の門徒さま方であると、惠信尼さまは考えておられたと思うんです。当時の結婚というのも、新郎新婦の二人の結婚にはちがいないんですけれども、当時の結婚には二人の合意で自由に結婚するというわけにはいかなかったんです。当時の結婚の習慣というのは、家柄だとか、あるいは家財だとか、そういったものが結婚の中心になっていくわけでした。親鸞聖人と惠信尼さまの結婚にも支障もあつたわけなんです。だから、私は親鸞聖人三十五歳、惠信尼さま二十六歳という、当時からしまして、もわりあいにお年を召してからの結婚ということが考えられるのではないかと思うんです。

それから能面上での問題なんですけれども、室町時代に作られている般若の面は、もちろん鎌倉時代あたりから見ることができませんが、はっきり能の上で上演されてまいりますのは、室町時代に頻繁に出てくるわけです。これはやはり戦争の多い室町期に、人の道だとか、人倫だとか、あるいは人間の善悪の問題を根本的に考え直しましよという時期が室町ではなかったかと思うんですね。その中で、人間の善悪感とい

うものを芸能を通して、能を見せることで、人間にはこういう恐ろしい感情がありませんよ、とか、是非こうした方面を直していかなくてはいけません、といった教えを、実は能の中に見せてきたのがこの代表する能面たちの活躍の場ではなかったかと思うんですね。「ああ、能面か」で終わりそうなことなんですけれども、実は能面が教える室町時代の人倫、人の道ですね。そういったものが私は非常に強く打ち出されてきているんだと思います。これまで、多くの能の種類が作られてまいりましたけれども、実は今日それが減少しつつあります。能を見るところが、退屈で、何を言っているかわからない能は面白くない。能の舞台というのも見たくない、という人がいらつしやるかもわかりません。しかし能をご覧になる時は、その曲目をプログラムの中でさっさとご覧になって、そして一度、その日演じられる能のストーリーについてさきに一度読んでみて下さい。非常に面白いんです。役者の動き、心境だとか、感情の移入はどういうふうにな舞台で行われていくかということ、みなさんが能の監督になったつもりで能をご覧頂くと、また新しい日本文化の発見があるんじゃないかと思うわけです。そういう意味で、何のへんてつもないような「カラスの子」の歌なんです

恵信尼さまのやさしさ

けれども、この歌の中にも実は今、日本人が忘れかけている、やさしい気持ち、やさしい感情というものが隠れて、潜んではいけないかと思うわけなんです。そういう意味で、私から見ますと親鸞聖人三十五歳、恵信尼さま二十六歳という、非常に今流に言いましたも大変な晩婚なんですけれども、それぞれの境界の中でですね、この年齢でご結婚されたということが記録に残ったというのが大変なことだと思っわけなんです。これはやはりご布教されていく、布教の足取りの中で、浄土真宗の布教というものがどんなに困難なものであったか。京都で安穩な生活の中で布教されたのではダメだったんですね。新潟という、越後という非常に遠隔の土地に行かれて、しかもそれは恵信尼さまの故郷であったということもございまして、縁故を辿り、知人を頼って盛んに布教活動をされていくわけなんです。能の布教ということと、能面を使つた能の舞台の繁栄ということを全国的に見てみましても、能面が残しているもの、あるいは能面が語ってくれるもの。非常に恐ろしい面と、やさしい面と二面あるわけですが、ちょうどこれは人間の二面性を謳ってもあるわけですね。そういう中で親鸞聖人と恵信尼さま、当時としては僧侶の結婚ということで否定されたわけなんです。

あるいは尼僧の結婚は、歓迎された結婚ではなかったのです。敢えて二人が結婚されたということは、当時の結婚の習慣というものに、勇気を出して抵抗されたというふうに私は考えるわけです。それと、能面がこうして残っているわけです。これは室町時代に非常に盛んに使われた能面のおもちゃですけれども、写しなんです。こうした能面や能を通して室町時代の人の道、人倫とか善悪感というものを具体的に表現している。本当に人を泣かせていくと、こんな恐ろしい鬼になるよ、というふうなことを見せてくれたのが、室町時代の能の話なんです。

『葵の上』という有名な能があります。これは執念物としての恨みつらみを折り重ねていく出し物の代表としてあるわけですが、『葵の上』の人物の場合は、非常に不幸な結婚をしたわけです。不幸な結婚をしたのは、全て夫が悪かったからだ、男性が悪かったからだというふうに、ここに善悪の規定をしようというわけです。けれども、人間の生き方の中に、悪い人良い人と単純に分けられない内面というのがあるんじゃないかと私は思うんです。『葵の上』の場合ですが、はじめ、葵の上はやさしい貴族の女性だったんです。けれど、非情な男性によって不幸になっていきますと、おそろ

惠信尼さまのやさしさ

しい般若に変わっていくわけですね。そこを横川の小聖という宗教家によって、加持祈禱を受けまして、葵の上はやさしい心に変わっていくのです。成仏ということばを使っていますが、やさしい女性に生まれ変わりました、そこで葵の上はやさしい自分の発見、心の発見をしています。このことが、実は『葵の上』のテーマなんです。一度機会がありましたら『葵の上』の能もご覧になってみて下さい。「ああ、籠谷が言っていたのはこういうことだったのか」とおわかり頂けるかと思います。

仏教で一般に教えられるのは、み仏によって救われている、もう一人のやさしい自分というものにお気付きなさいというのが、仏教、み仏の教えではないかと思うんですね。そしてそれを芸能で強調しているのが、室町時代の能なんかも表現されているものがあるんだと思います。人間には他人の非を許せないで他人ばかりを恨むような、一面があります。これをよく反省してごらんなさいと説いています。自分だって許せないものを持っているんじゃないですか。こういうことをですね、反省の具にして私は能面というものが使われているということを考えてみるわけです。

おわりに

人間は、そのやさしさというのを一生涯持ち続けていくことに努力しなさいということが、能の教えにあります。それは能面を使って、恐ろしい能面、あるいはやさしい能面、これは人間の二面性ですけれども、能面を使って教えています。他人の非を許し、やさしい人となりなさいと。そして生涯やさしさを保っていくことが人間の肝心なポイントですよということを教えているわけですね。私どもは、なかなかやさしさを保ち続ける努力というものはできにくいわけなんですけれども、そのポイントを決めてくれるのが、実は仏教信仰ではないかと思うんですね。自分の感情だけではなかなか善悪の判断をすることはできません。しかし、み仏様のみ教えというものを信じていく場合ですね、仏教信仰の真実というものを心の中に抱いておきますと、自分の言動の善悪を常にチェックしていくというのが仏教信仰の教えの中にあると思います。そういう意味で、恐ろしい般若の面とか、やさしい小面というのを対比して両者

恵信尼さまのやさしさ

を見て頂きましたけれども、誰だって自分の心の中には柔らかな一面を抱いていたというのを理想とするのが人間ではないかと思いますが、自分の言動の善悪を常にチェックしていくために、私が今日、能の話としてお伝えしたわけなんですけれども、そういうことに自分の感情の中で、もしもずれているものがありましたら、みなさんのお気持ちの中でこれを整理して見て頂いたらどうかと思うわけです。私はそういう意味では、人間としては小面としての感情と、般若の感情の葛藤というのは、人間生活の永遠の課題ではないかと思えます。

どうぞ、こんな壇上から口はばったことを申し上げられる人間ではないんですけれども、できうるならば、小面のようなやさしい感情や気持ちで生きていけたら幸せだなと思うわけですが、それは私一人だけじゃなくて、みなさまと一緒にやさしい気持ちでまいりたいものだと思います。大変雑ばくな話でございましたが、ご静聴ありがとうございました。

——二〇〇七年六月二九日——